

## 大学生の精神衛生

市 河 淳 章

本学における学生相談の活動は昭和50年度から保健管理センターで開始され現在に至っている。本学での精神衛生に関する学生相談は、自発来談と、新入生を対象としたスクリーニング・テストなどによる呼び出し面接の両方から行なっている。呼び出し面接は基準をいろいろ変えて試みたが、主としてスクリーニングという早期発見や予防的機能の発揮というよりも、将来本当に困まった状況に陥った時には来所してくれるであろうことを願って、啓蒙活動的意味を込めたものであった。相談室の存在を知ってもらうには、少しずつ学生とのふれあいを通じた拡がりが必要だと考えたわけである。実際、ごくわずかであれ、そのことがきっかけで来所したり、友人に紹介してくれた例もあるなど、ある程度の効果も認められる。現在では、1～4年の全学年が、新入生のオリエンテーションで学生相談の説明を受け、現実の認識の程度はともかく、少くとも存在を知っていることになる。

本報告は、(1)これまでの精神衛生に関する学生相談の概要 (2)精神衛生に関する入学時健康調査(UPI)に関する考察を行なう。

### (1) 本学における学生相談の概要

(i) 自発来談…昭和50年度から53年度(4月～翌3月)にわたる4年間の自発来談は表1に示す通りである(教官などによる紹介も含む)。相談室を訪れた学生数、延ケースとともに、年々少しずつではあるが増加している。1人あたりの平均面接回数は、昭和50～52年の2.3～2.7回に対して、昭和53年では4.1回となるが、実際には1回から20回以上にわたるものまでである。自発来談学生数の在籍数に対する割合は、昭和50年から順に、0.2、0.6、0.6、0.9%となっている。また、学部別の在籍数に対する割合は、いずれも小さく、差が認められない。

表 1 自 発 来 談 延 ケ ー ス

年度	学部 性	教 育	経 済	農 学	計
		50年	男	5 (2)	0
	女	11 (4)	0	0	11 (4)
	計	16 (6)	0	3 (1)	19 (7)
51年	男	5 (2)	18 (8)	5 (4)	28 (14)
	女	4 (2)	0	10 (2)	14 (4)
	計	9 (4)	18 (8)	15 (6)	42 (18)
52年	男	4 (2)	20 (8)	2 (1)	26 (11)
	女	16 (4)	0	3 (2)	19 (6)
	計	20 (6)	20 (8)	5 (3)	45 (17)
53年	男	0	34 (13)	30 (9)	64 (22)
	女	46 (4)	0	1 (1)	47 (5)
	計	46 (4)	34 (13)	31 (10)	111 (27)

( ) 内は人数

延ケースを月別にみたのが表2に示してある。度数が少ないため、4年間の延人数でみた面接状況を、月毎にまとめてみると、来談には3つの山があるように思われる。第1は新学期開始後1・2カ月の、新入生を中心とした、新しい生活環境に対する不安感情のあらわれである。入学後、はたしてうまく適応できるのだろうかという漠然とした不安、あるいは新しい集団内における人間関係や生活行動に対する不安状況を反映している。これらのほとんどは夏休みに入る頃までにはどうか大学生としての生活に慣れてくるのがほとんどである。次いで、10月および1月との試験期をはさんだ時期の不安定な状況とに区別される。この期はストレスの相乗的な効果をもつのであろうか。主として長期的継続ケースにあてはまる。

表 2 月別自発来談延ケース

年度 \ 月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
50年		0	0	0	0	3	3	1	2	5	3	2	19
51年	3	0	11	3	3	0	3	4	6	4	2	3	42
52年	3	1	7	0	0	2	2	4	4	11	8	3	45
53年	8	14	17	8	5	9	10	8	7	11	9	5	111

自発来談を学年別に示したものが表3である。来談人数は1年生が最も多く、ほぼ学年順に減少している。1・2年生は、3・4年生の2倍以上であるが、2年以上はそれほど変わらないことが示されている。

表 3 学年別自発来談 (人数)

年度	性	学年				計
		1	2	3	4	
50年	男	1	2	0	0	3
	女	3	0	0	1	4
51年	男	8	3	1	2	14
	女	2	2	0	0	4
52年	男	6	0	2	3	11
	女	1	3	2	0	6
53年	男	14	3	4	1	22
	女	1	0	3	1	5

表4は主訴の内訳を性別にみたものである。実数が少ないうえ、毎年同じ傾向とは限らず、一定の傾向を見出すのは困難である。そこで、昭和50～53年度を合計した延人数で便宜的にみると、最近4年間で最も多いものをあえて3つあげるとすれば、身体 (psychosomatic なものを含む)、性格、進路に関するものである。前2つの点に関しては、いずれも男子で特に多い特徴である。

表 4 自 発 来 談 主 訴 の 内 訳

内 訳	年 度			昭 50 年			昭 51年			昭 52 年			昭 53 年			昭50~53年		
	性 別	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計		
不 安 感 情		0	1	1	0	0	0	1	0	1	4	0	4	5	1	6		
人 間 関 係		0	0	0	0	1	1	0	0	0	5	0	5	5	1	6		
身 体・心 身		1	0	1	3	0	3	4	1	5	5	0	5	13	1	14		
性 格		1	0	1	3	0	3	3	1	4	2	1	3	9	2	11		
進 路		0	0	0	2	2	4	0	2	2	1	2	3	3	6	9		
意 欲 減 退		0	0	0	3	0	3	1	0	1	2	0	2	6	0	6		
赤面(視線)恐怖		0	1	1	1	1	2	0	0	0	1	0	1	2	2	4		
心 因 反 応 他		0	1	1	0	0	0	1	2	3	1	2	3	2	5	7		
そ の 他		1	1	2	2	0	2	1	0	1	1	0	1	5	1	6		
計		3	4	7	14	4	18	11	6	17	22	5	27	50	19	69		

(ii) 呼び出し面接…精神的健康管理としての相談活動は、上里・山下(1970)によれば、治療的機能、予防的機能、それに開発的機能に分類される。精神的に不健全な、あるいは不健康に陥る可能性のある学生に対する予防的処置として、早期発見のための手がかりをスクリーニング・テストに求めて呼び出し面接を行なうことは、意義あるものと思う。

本学では昭和50年以前からも、UPI (Universal Personality Inventory) が新生生に実施されてきている。スクリーニング・テストとしての意味にかなった測定用具として最適かどうかは別として、現在も新生生のオリエンテーション時に実施し、呼び出し面接の参考にしている。

昭和50年と51年度には、前期と後期の2度にわたって呼び出し面接を行なったが、昭和52年度は前期だけ実施した。いずれも呼び出しの基準は、試行錯誤的工夫の意味もあってその都度異なっている。

表5は、呼び出した学生数と、それに応じた人数とを表示したものである。呼び出し人数は、在籍者の3~10%の範囲内である。まず、呼び出した学生の来所率は表に示されているように全体的に高いが、特に女子学生の方が男子よりも呼び出しによく応じることがわかる。ところが、表には示されていないが、前期に呼び出した場合は、7~8割がそれに応じる。後期に呼び出すと、例えば昭和51年の場合には55%の来所率に見るように、低下する傾向がある。

表5 呼び出し面接人数 \*

年度	性	学部	教育	経済	農学	計	面接人数/在籍数	面接人数/呼び出し数
昭50年	男		4 (4)	18 (24)	12 (20)	34 (48)	7.1(%)	70.8(%)
	女		21 (25)	1 (1)	2 (3)	24 (29)	10.2	82.8
	計		25 (29)	19 (25)	14 (23)	58 (77)	8.1	75.3
昭51年	男		7 (10)	15 (20)	9 (20)	31 (50)	5.9	62.0
	女		12 (17)	2 (2)	5 (5)	19 (24)	8.9	79.2
	計		19 (27)	17 (22)	14 (25)	50 (74)	6.7	67.6
昭52年	男		2 (2)	10 (13)	11 (14)	23 (29)	4.4	79.3
	女		7 (8)	0 (0)	1 (2)	8 (10)	3.3	80.0
	計		9 (10)	10 (13)	12 (16)	31 (39)	4.1	79.5

\* ( ) 内は呼び出し人数

昭和50年度前期の呼び出しでは、UPIの総得点を主として、重要項目に対する反応内容なども考慮して任意的に求めた基準に従った。一方、後期には、UPIの特定の項目(Q31)に対する反応を示した学生のみを対象とした呼び出し面接を行なった。すなわち、「死にたくなる」を肯定していた者は、1年生のうち35名(在籍数の1.2%)に及び、そのうち25名が呼び出しに応じ面接を受けた(男子12/18名、女子13/17名)。そのうちほとんどは、ロマンチックな反応であったり、現実的レベルの反応でないことが確かめられた。しかし、現実的レベルで、かつて考えたことがある者は2名いた。「死にたい」という反応が以外に多いのは驚ろきであったが、同時に、設問の表現形式の問題だけでなく、青年期の問題としてとらえるべきものなのであろうか。

UPIに基づく呼び出し面接からは、継続的に面接が必要と思われる者は、数名に過ぎなかった(スクリーニングとは本来そういうものかもしれないが)。特に、新入生という特徴から、入学時の極めて一時的な精神状態を代表していることが、呼び出しに応じた学生との面接によって感じられる。むしろ、呼び出しにも応じてくれない学生の方が気になるところでもある。

昭和51年度からの呼び出しは、もっと本人の希望を生かした方法をとることにし、UPI調査の中で、「性格や悩みのことで相談してほしい」という別項目を設け、これに反応した学生を主として(中には反応内容を考慮して含めた者も

ある) 呼び出し面接の対象とした。この別項目に反応している学生は、1年在籍数の約1割(男子9.5%, 女子11.3%)にも及んだ。予想外に多かったため、前期と後期に分けて呼び出し面接を行なった。その結果、何らの問題も認められない者が最も多く、次いで、入学時の不安感情や寮を中心とする(特に男子)

表 6 呼び出し面接の結果

昭50年度	男	女	計
D *	24	22	46
人間関係	4	2	6
視線恐怖	2	0	2
性格他	4	0	4

\* Dは、まったく問題ないもの(以下の表記も同じ)

表 7 呼び出し面接(相談希望者)の結果

内 訳	年度 性別	昭 5 1 年			昭 5 2 年		
		男	女	計	男	女	計
D		11	8	19	2	1	3
不安感情		4	6	10	3	2	5
人間関係		7	0	7	1	1	2
身体・心身		3	1	4	11	1	12
性格		3	2	5	2	1	3
進路		1	2	3	1	2	3
赤面(視線)恐怖他		1	0	1	2	0	2
その他		1	0	1	1	0	1

人間関係や生活習慣のとまどいなどに関するものが主な相談内容であった(表6参照)。これらで相談希望者の70%を占めていた。従って、このような方法の結果は、むしろ啓蒙活動的意味あいの方が依然として強いものであった。よく読まずに適当に印をしていたり、「先で困まる事があったらお願いしておいた方がよいと思ひ」などというものも含まれていたようである。そこで、昭和52年度には、現在の状況が表わされるよう、現在という言葉をごチ印刷にして添えて相談希望の反応をとり、希望者を呼び出し面接した。表6,7では、この間の相違が読みとれる。このようにして行なった呼び出し面接(表5をみると、呼び

出しに應じる比率が全体に高いことがわかる)の特徴は、男子学生を中心とする青年期特有の身体に関する不安や悩みが多かった(表7参照)。このほとんどは、正しい知識の不足に起因するものである。しかし、さしせまった相談希望でない者も若干含まれていたため、昭和53年度からは、新入生オリエンテーション時に、各学部にて依頼実施しているUPI調査の折に、相談希望項目に関して、別にインストラクションをしてもらい、今すぐ相談したいことのある人に反応を求めてもらうよう改めた。従って、表1では昭和53年度には、このようにして面接した7名の学生も含めてある。表3で、昭和53年度の1年生の人数比率が以前より増加しているのはこのためである。

以上、精神衛生に関する学生相談の活動状況を、昭和50年の初年度から4カ年にわたって、自発相談と呼び出し面接の両面から報告した。

## (2) 入学時の精神的健康調査(UPI)に関する考察

(i) UPIの結果…全国の大学で保健管理センターあるいは学生相談室を中心に行なわれている学生の精神衛生活動には、既に示してきたように、自発相談の他に適応障害をもつ学生の早期発見や予防をどうするかという問題がある。自ら相談にやってくる学生よりも、このような学生を発見し相談活動をすすめることの方がむづかしい。仮りに、カウンセリングの必要と思われる学生を呼び出しても、呼び出しに應じない学生もあり、このような学生こそ問題をはらんでいる場合もある。はたして、効果的な呼び出しであったかは、予防的見地から見ると重要な問題である。スクリーニングという観点からは、どんなテストを援用するか、どんなテスト・バッテリーを考えるのか、二次的スクリーニングまで考慮するのかといった幾つかの問題が関係してくる。

山下(1965)によれば、スクリーニング・テストの実施校は約60%に及び、なかでも国立大学の場合は75%に達する。最も利用されているスクリーニング・テストは、利用率の高いものから順に列記すると、UPI, Y-G, MMPI, CMI, TPIらが挙げられ、その他にもMHSQ, NSなど、大学によって独自に開発されたテストまで含めると20種類に及んでいる。最もよく利用されているUPIは、全国保健管理協会によって作成され、主として短時間に全員面接する時など、チェック・リスト的に用いるのに便利なようにできている。しかし、

特定の2, 3の大学のように、スタッフの多いところでは本来の目的にそった使い方がされているけれども、むしろ例外である(山下・上里(1970))。テストの作成経路について述べている宮田(1967)は **Personality Inventory** という意味でなく、むしろ **Psychiatric Inventory** と呼ぶべきものとしている。測定内容については、身体的、性格の特徴、抑うつ状態、精神分裂症体験、生活意欲の減退、対人的適応困難など、約60項目(Lie scale と呼ばれる4項目を除く)から構成されている(改訂版A(1)~A(5)で数項目少なくなっている)。測定度としては、Lie scale を除く肯定項目数の合計を用いたり、特定の項目(重要項目)に任意的にウェイトをかけて合計する方法などが用いられる。自己防衛の強い人は極端な得点として表われることも考えられ、そのこともまた問題の対象とされている。

いずれにせよ、UPIをスクリーニング・テストとして用いる場合、標準化された性格テストと同様の扱いをするのではなく、できるだけ、本来の目的にかなった使い方が望ましいわけである。テストとしての問題はあつものの、5~10分で調査実施でき、採点も短時間に処理でき経済的などの点で最も利用される主な理由であらう。面接の導入にも使い易い利点もある。

まず、UPIの結果を昭和50年度(回収率・男子99.3%, 女子97.9%)の場合に例をとってみよう(表8)。表中の数値は、ウェイトをかけない粗点、すなわち、Lie scale を除く60項目中の平均肯定数をあらわしている。参考までに、ウェイトをかける対象とされる重要項目(Q, 31, 32, 46, 53, 60, 62, 63—改訂A(5)版では少し異なる)の肯定は、全体的にみると平均1~2個である。ウェイトをかけた得点を求めても、個人の相対的得点の大小はほとんどかわらなかつた。むしろ、問題があるとすれば、ウェイト以前の問題があるように思われた。

表8はフェイス・シートのいろいろなクロス分析から、主要な要因分析の例としてとりあげた。新入生の入学時のUPI得点が、宿所形態によって相違していることがわかる(表9)。すなわち、自宅あるいは下宿生と比較して、寮生の得点が特に男子で高い。彼らにとって、大学生活を始めるにあたり、初めての集団生活が、少くとも一時的に高い緊張と精神的不安定をもたらしているように



表 8 UPI の 結 果\*

学部	性	住居 測定値			自 宅			下 宿			寮			計		
		N	$\bar{X}$	SD	N	$\bar{X}$	SD	N	$\bar{X}$	SD	N	$\bar{X}$	SD			
教育	男	25	18.1	10.1	16	14.9	8.6	4	33.5	14.1	45	18.3	11.2			
	女	142	17.7	10.0	45	19.0	9.0	24	21.0	9.5	211	18.4	9.8			
	計	167	17.8	10.0	61	18.0	9.1	28	22.8	11.2	256	18.4	10.1			
経済	男	79	17.2	9.7	153	15.9	9.4	35	20.7	9.3	273	16.8	9.6			
	女	6	11.3	7.5	4	13.3	4.7	1	12.0	0.0	11	12.1	6.3			
	計	85	16.8	9.7	157	15.8	9.4	36	20.5	9.3	284	16.6	9.5			
農学	男	14	14.4	10.5	102	16.8	8.8	41	23.0	10.3	160	18.1	9.9			
	女	2	20.0	1.0	6	13.3	8.5	5	12.4	9.4	13	16.3	8.8			
	計	16	15.1	10.0	108	16.9	8.8	46	21.9	10.7	173	17.9	9.8			
全体	男	118	17.0	10.0	271	16.1	9.2	80	22.5	10.5	478	17.4	9.9			
	女	150	17.5	9.9	55	18.6	8.9	30	19.3	9.9	235	17.9	9.7			
	計	268	17.3	9.9	326	16.6	9.2	110	21.6	10.4	713	17.6	9.8			

\* 昭50年のデーター，粗点の算出は重みづけしない場合

表 9 分散分析表 (表8の学部結合データー)

変 動 因	SS	df	MS	F
住居形態	17.31	2	8.66	6.77**
性	.03	1	.03	—
交互作用	8.28	2	4.14	3.23*
誤 差	893.15	698	1.28	

\*  $P < .05$  \*\*  $P < .01$

思われる。このことは面接の印象とも符号する。高久ら (1975) が、面良者の30%は寮生であるという他大学の結果も同様の意味を指していると考えられる。

表10は、昭和51年のデーターから、結果を知りたいかどうかに対する反応によるUPI得点の差をみたものである。結果を知りたいと答えた者は、知りたくないと反応した学生よりも有意に得点が高いことがわかる。もちろん、この場合、相対的な比較での差であり、問題があるということではない。しかし、調査に何らかの関心を示すものが、そうでない者よりも平均得点に差のあること

表10 「結果を知りたいかどうか」によるUPI得点差

反 応		肯 定	否 定	t
男	N	237	270	6.16**
	$\bar{X}$	12.24	8.21	
	SD	7.67	7.02	
女	N	110	97	2.56**
	$\bar{X}$	12.51	9.60	
	SD	8.45	7.74	
計	N	347	367	6.59**
	$\bar{X}$	12.33	8.58	
	SD	7.92	7.24	

(昭51年のデータ)

は興味深い。因みに、相談希望者の平均得点が、そうでないものよりも有意に得点が高かったことは当然である。

(ii) UPIの変動性…UPIが、パーソナリティよりも、問題徴候的な側面を測るものとするならば、もともと入学時の徴候は、パーソナリティ的なものよりも、自己の感じる状況によって変動しやすいものであると考えられる。UPIで測られる測度が、どの程度個人に備わる安定した側面をとらえているのであろうか。昭和50年あるいは昭和51年に呼び出し面接した一部の学生について、UPIの測度の時間経過に伴う変動性の有無を試み的に検討したのが表11、12である。2度目のUPIの調査時期は、ランダムに面接の前、後でカウンター・バランスをとった。表11と12では、入学時の平均得点が相違しているが、これは呼び出し基準が異なることに起因するのであろうか。いずれにしても、入学時から2カ月後の6月と、約半年後の9月のどちらにおいても、4月時の得点よりも著しく低下方向に変動することが示された。これらの結果は、当初の得点が比較の高い者でも、平均的な場合でも、いずれも入学時をピークにかなり変動することがわかった。従って、UPIの測度が将来を予測するという意味よりも、現在の状態の表現であることがわかる。これこそ、UPI作成の本来的意図に合致するというべきであろう。

時間経過に伴って変動するとしても、変動しやすいのはどんな項目かとい

表11 UPIの変動性 (4~6月)

時期	性		計	
	男 UPI N=20	女 UPI N=11		
4月	$\bar{X}$	17.30	16.27	16.94
	SD	10.37	10.75	10.52
6月	$\bar{X}$	11.85	9.91	11.16
	SD	9.96	8.41	9.48
r		.743	.782	.752
t		3.25**	3.00**	4.45**

\*\* P<.01 (昭和51年のデータ)

表12 UPIの変動性 (4~9月)

時期	性		計	
	男 UPI N=9	女 UPI N=13		
4月	$\bar{X}$	28.89	23.69	25.82
	SD	5.70	6.89	6.92
9月	$\bar{X}$	13.44	12.23	12.73
	SD	8.19	5.48	6.75
r		.298	-.169	.074
t		5.16**	4.18**	6.45**

\*\* P<.01 (昭和50年のデータ)

う問題がある。変動の方向が、肯定(否定)から否定(肯定)、いずれも肯定(否定)の4つの可能性について分析したが、何しろ内容分析するには対象が少ないので、これ以上細かい内容についてはふれることはできない。

(iii) UPIのG-P(上位-下位)分析……ここではUPIの項目の「UPI測定」に対する弁別性を全項目について、昭和50年度のデータにより検討する。まず、新入生全員のUPI得点(粗点)を順位づけし、得点の高い者、低い者を上下約25%ずつ抽出した。分析の対象となったのは、High群169名(全体の23.7%)、Low群163名(22.9%)である。High群の平均得点は、 $\bar{X}=31.36$ 、SD=5.63、得点の範囲52~25、Low群では $\bar{X}=5.71$ 、SD=2.52、得点の範囲9~0であった。平均得点間に学部、性差はなかったため、以下の分析は男女合計のみで行なった(item番号は末尾の調査票参照)。

表13 弁別力の高い項目例(item 8)

反応	総得点		計
	高	低	
肯定	152	30	182
否定	17	133	150
計	169	163	332

$\chi^2=171.43$  df=1 P<.001

表14 弁別力の高い項目例(item 47)

反応	総得点		計
	高	低	
肯定	131	14	145
否定	38	149	187
計	166	163	332

$\chi^2=160.23$  df=1 P<.001

表13,14は最も典型的な例である。UPIの測定で高得点となる学生が、ほと

んどその質問項目に肯定の反応をし、逆に、総得点の低いものがほとんど否定する項目をあらわしている。このような項目は、この場合、総得点(UPI測度)に対する弁別力が強い項目だと考えられる。これと類似した反応パターンを示したのは、7～17, 24, 27, 29, 30, 39, 40, 42, 44, 47～49, の23個の項目にあてはまった(但し, 15, 17はUPIの改訂A(5)ではなくなっている)。

表13, 14の例は、ある項目に対する反応の分布が比較的等分される項目である。項目によっては反応に偏りがあり、もともと肯定率の少ないものがある。このような項目例が表15, 16の例に示されている。これらの例は、項目の弁別力の弱いものである。ただし、表15に示されている例は、重要項目と呼ばれる

表15 肯定率の低い項目例(item 31)

反応 \ 総得点	高	低	計
肯定	34	0	34
否定	135	163	298
計	169	163	332

$\chi^2=36.53$      $df=1$      $P<.001$

表16 肯定率の低い項目例(item 45)

反応 \ 総得点	高	低	計
肯定	54	10	64
否定	115	153	268
計	169	163	332

$\chi^2=35.54$      $df=1$      $P<.001$

項目の1例である。もともと肯定反応は少ないものの、Low群にはまったく反応がないところに意味があるといえる。従って、重要な問題徴候とされることが、面接の結果と符号するものであるならば、これらの項目に弁別力をもたせるために、どの程度のウェイトを与えるかなどの検討が可能であろう。同様の弁別力を示す項目は、2, 18～21, 34～37, 41, 43, 45, 51, 52, 61の他、重要項目と呼ばれるもののうち、31, 32, 46, 53, 60, 62, 63の、合計22個に認められた。

その他の反応パターン例が表17, 18である。表17の例では、High群間では肯定、否定の率が同じ位であるがLow群の肯定率の低いもの、表18の場合には、High群の肯定率が否定率をごくわずかにうまわっている点だけが異なっている。しかし、Low群の肯定反応が少ないのは、Low群の得点範囲9～0から考えても、あたり前であることを考慮すると、結局、High群の特徴が

表17 その他のパターン例(item 1)

反応	総得点		計
	高	低	
肯定	81	21	102
否定	88	142	230
計	169	163	332

$$\chi^2=47.87 \quad df=1 \quad P<.001$$

表18 その他のパターン例(item 28)

反応	総得点		計
	高	低	
肯定	90	14	104
否定	79	149	228
計	169	163	332

$$\chi^2=76.94 \quad df=1 \quad P<.001$$

はっきり出ない項目だとみなすことができる。

このような反応パターンに分類されたのは、表17のパターンとして、項目1, 3, 33, 50, 59, 後者のパターンに入るものとして、4, 5, 23, 25, 28 が認められた。

一方、UPIには4つの Lie scale と名づけられた、得点に無関係の項目がある。ただしその内容は、むしろ他の項目と同様に徴候の項目の一部になるものも予想される。

表19～22は、これら4項目についての反応傾向が示されている。Lie scale 的の反応パターンを示すのは、項目6の、「身体の調子がよい」位のもので、統計的には有意な差が認められるものの、あとは Lie scale と呼ぶにふさわしい項目かどうか疑わしい。結局、理想的なG-P分析の分布を示す項目は半分を満たないことがわかった。

表19 Lie scale 1 (item 6)

反応	総得点		計
	高	低	
肯定	30	102	132
否定	139	61	200
計	169	163	332

$$\chi^2=69.60 \quad df=1 \quad P<.001$$

表20 Lie scale 2 (item 22)

反応	総得点		計
	高	低	
肯定	32	73	105
否定	137	90	227
計	169	163	332

$$\chi^2=25.64 \quad df=1 \quad P<.001$$

表21 Lie scale 3 (item 38)

反応	総得点		
	高	低	計
肯定	72	121	193
否定	97	42	139
計	169	163	332

$\chi^2=34.10$  df=1 P<.001

表22 Lie scale 4 (item 45)

反応	総得点		
	高	低	計
肯定	49	65	114
否定	120	98	218
計	169	153	332

$\chi^2=4.35$  df=1 P<.05

(iv) UPI測度の意味……結局、UPIで高得点（相対的なものであれ）であるということの意味について考察してみたい。表23は、全学生の40%以上が肯定している項目をまず抽出し、結果として得られた17項目のうちから、「総得点（UPIの測度）の高い者が必ず肯定し、低い者は必ず否定する」特徴を、5つの特徴で説明できないものかと考えた。6188通りの組みあわせのうちから得られた最も典型的なパターンが表23である。表では、High群の79.3%がこれら5つの特徴のうち4つ以上を肯定し、逆にLow群の84.7%が1つ以下の肯定しか示さない5つの特徴群をあらわしている。

表23 高得点・低得点者間を弁別する特徴群 \*

総得点	肯定数							計
	0	1	2	3	4	5		
高	0	5	7	23	38	96	79.3%	169
低	96	42	18	6	1	0		
計	96	47	25	29	39	96		332

$\chi^2=271.02$  df=5 p<.001

\* item 8, 26, 27, 29, 39 の組みあわせの結果

結局、UPIの高得点者は低得点者にくらべて、「とりこし苦労をする」、「なんとなく不安である」、「ものごとに自信をもてない」、「何事もためらいがちである」、「こだわりやすい」の5つの特徴をもった学生を弁別しているわけである。これらのパーソナリティ特性は、神経症に陥りやすい特徴をあらわすものでは

あるが、必ずしも問題徴候とはならない場合もあるわけである。personality よりも psychiatric なものとしながらも、結局、内向性の強いパーソナリティの者を弁別することになると思われる。

表24は、本学における新入生の肯定率の高いもの5つを選び、項目番号順に

表24 肯定率の高い項目

項目	頻度	肯定(%)
7	395	55.4
8	413	59.7
16	400	56.1
17	429	60.2
56	399	56.0

列記したものである。香大生の新入生の反応の最頻値を示す特徴は、「気が小さい」、「とりこし苦勞をする」、「決断力が乏しい」、「眼が疲れる」、「気をまわす」が挙げられる。眼が疲れるという受験戦争の残効的特徴も、4月はじめにしてはうなづけるとして、残りの特徴こそ、香大生のモータル・パーソナリティ特性をあらわすものであろう。

ところで、表23と表24の項目比較では、ほとんど共通性のないことがわかる。もしも、両者の特性が、ほとんど一致するものであれば、母集団の肯定率の高いものばかりであり、弁別性をもつ特性群とはいえない。肯定率の高いもの10項目まで拡大してみても、2項目が重複するにすぎない。結局、肯定率の高いものと弁別力のある特性群は独立したものであった。

UPIの構造的側面の検討に関しては、因子分析的手法など、さらに分析をすすめる必要がある。

(V) その他……UPIの平均得点についてみると、男女間に差のないことは先にもふれたところである。しかし、個々の項目についてみると、大まかにはほとんど差はないものの、肯定率に有意な差の認められるものがある。男子の方が女子よりも有意に高い肯定率を示すものに、気が小さい(男子59.4%, 女子47.2%  $\chi^2=9.46, df=1, P<.01$ , 以下検定略), 性器のことが気になる(男子13%, 女子2.6%), 親が期待しすぎる(男子22.0%, 女子11.1%)があげられる。逆に、女子の方が男子よりも有意に高い肯定率を示すものは、頭痛がする(男子22.4%, 女子35.3%), 首すじや肩がこる(男子34.1%, 女子50.6%)の2項目である。

要約 本報告は、(1) 本学における昭和50年～53年度にわたる精神衛生に関する相談活動の概況を、自発来談と呼び出し面接の両方から報告した。(2) 本学の呼び出し面接の資料として用いてきたUPIは、最もよく利用されているスクリーニング・テストである。UPIの特徴や限界についての知見をうるため、G-P分析を行ない、また、測定されるものの意味について考察した。現在の問題徴候をチェックする目的のためには好都合なものと考えられるが、測度そのものは安定したものではない。予防的観点からのスクリーニング・テストとして用いる場合、他のテスト・バッテリーを工夫するなり、第二次的スクリーニングの方法を考えるなどの方策が、よりよい効果をもたらすであろう。

附記・UPIのデータ集計にあたっては、田北助教授に大変お世話になりました。記して感謝いたします。

#### 引用文献

- 上里一郎・山下 勲 1970 精神的不健康学生のスクリーニング—その展望と探索的实践  
— 広島大学教養部紀要第2部, 4, 1—36.
- 宮田尚之 1967 UPIおよびNSテストについて 第5回全国保健管理研究集会報告書  
139—143.
- 高久信一・嘉部和夫・成田 諭 1975 大学新生生の適応について —その1— UPIを中心として 日本教育心理学会第17回総会発表論文集 310—311.
- 山下 勲 1970 わが国における学生の精神健康管理のためのスクリーニング・テストの実態調査結果について 愛媛大学保健管理センター



付表 入学時UPI調査表

調査月日：昭和 年 月 日

氏名	性別	年令	籍	才	学部	学科	年	入学年度	年
父(生、亡)	兄( )人、	弟( )人、	妹( )人、	その他	現住所	自宅	下宿	寮	その他( )
母(生、亡)	姉( )人、	妹( )人、	弟( )人、	その他	自	宅	下宿	寮	その他( )

下記の質問は多くの人々が、しばしば経験することについて書いて書いたものです。これは、あなたの経験などの理解を促すための質問です。あなたは最近1年位の間に、ときどき経験したり、感じたりしたことのある項目については○を、ない項目については□の中に書いて下さい。所要時間は10分程度です。なお、これは、あなた個人のことですから、個人にもたらしたり、他の目的に使うことは決してしないで下さい。書き終わったら、もう一度読んで、書き直しがいいか、また、氏名など記入したか、確かめて下さい。

**秘**

UPI (A2)

1	緊張を感じる	9	10	7
2	不眠症がひどくなる	10	11	8
3	朝起きるのが辛い	11	12	9
4	朝起きるのが辛い	12	13	10
5	朝起きるのが辛い	13	14	11
6	朝起きるのが辛い	14	15	12
7	朝起きるのが辛い	15	16	13
8	朝起きるのが辛い	16	17	14
9	朝起きるのが辛い	17	18	15
10	朝起きるのが辛い	18	19	16
11	朝起きるのが辛い	19	20	17
12	朝起きるのが辛い	20	21	18
13	朝起きるのが辛い	21	22	19
14	朝起きるのが辛い	22	23	20
15	朝起きるのが辛い	23	24	21
16	朝起きるのが辛い	24	25	22
17	朝起きるのが辛い	25	26	23
18	朝起きるのが辛い	26	27	24
19	朝起きるのが辛い	27	28	25
20	朝起きるのが辛い	28	29	26
21	朝起きるのが辛い	29	30	27
22	朝起きるのが辛い	30	31	28
23	朝起きるのが辛い	31	32	29
24	朝起きるのが辛い	32	33	30
25	朝起きるのが辛い	33	34	31
26	朝起きるのが辛い	34	35	32
27	朝起きるのが辛い	35	36	33
28	朝起きるのが辛い	36	37	34
29	朝起きるのが辛い	37	38	35
30	朝起きるのが辛い	38	39	36
31	朝起きるのが辛い	39	40	37
32	朝起きるのが辛い	40	41	38
33	朝起きるのが辛い	41	42	39
34	朝起きるのが辛い	42	43	40
35	朝起きるのが辛い	43	44	41
36	朝起きるのが辛い	44	45	42
37	朝起きるのが辛い	45	46	43
38	朝起きるのが辛い	46	47	44
39	朝起きるのが辛い	47	48	45
40	朝起きるのが辛い	48	49	46
41	朝起きるのが辛い	49	50	47
42	朝起きるのが辛い	50	51	48
43	朝起きるのが辛い	51	52	49
44	朝起きるのが辛い	52	53	50
45	朝起きるのが辛い	53	54	51
46	朝起きるのが辛い	54	55	52
47	朝起きるのが辛い	55	56	53
48	朝起きるのが辛い	56	57	54
49	朝起きるのが辛い	57	58	55
50	朝起きるのが辛い	58	59	56
51	朝起きるのが辛い	59	60	57
52	朝起きるのが辛い	60	61	58
53	朝起きるのが辛い	61	62	59
54	朝起きるのが辛い	62	63	60
55	朝起きるのが辛い	63	64	61
56	朝起きるのが辛い	64	65	62
57	朝起きるのが辛い	65	66	63
58	朝起きるのが辛い	66	67	64
59	朝起きるのが辛い	67	68	65
60	朝起きるのが辛い	68	69	66
61	朝起きるのが辛い	69	70	67
62	朝起きるのが辛い	70	71	68
63	朝起きるのが辛い	71	72	69
64	朝起きるのが辛い	72	73	70
65	朝起きるのが辛い	73	74	71
66	朝起きるのが辛い	74	75	72
67	朝起きるのが辛い	75	76	73
68	朝起きるのが辛い	76	77	74
69	朝起きるのが辛い	77	78	75
70	朝起きるのが辛い	78	79	76
71	朝起きるのが辛い	79	80	77
72	朝起きるのが辛い	80	81	78
73	朝起きるのが辛い	81	82	79
74	朝起きるのが辛い	82	83	80
75	朝起きるのが辛い	83	84	81
76	朝起きるのが辛い	84	85	82
77	朝起きるのが辛い	85	86	83
78	朝起きるのが辛い	86	87	84
79	朝起きるのが辛い	87	88	85
80	朝起きるのが辛い	88	89	86
81	朝起きるのが辛い	89	90	87
82	朝起きるのが辛い	90	91	88
83	朝起きるのが辛い	91	92	89
84	朝起きるのが辛い	92	93	90
85	朝起きるのが辛い	93	94	91
86	朝起きるのが辛い	94	95	92
87	朝起きるのが辛い	95	96	93
88	朝起きるのが辛い	96	97	94
89	朝起きるのが辛い	97	98	95
90	朝起きるのが辛い	98	99	96
91	朝起きるのが辛い	99	100	97

※ No. 等は記入しないこと

性別

7 6 5 4 3 2 1

37	朝起きるのが辛い	45
38	朝起きるのが辛い	46
39	朝起きるのが辛い	47
40	朝起きるのが辛い	48
41	朝起きるのが辛い	49
42	朝起きるのが辛い	50
43	朝起きるのが辛い	51
44	朝起きるのが辛い	52
45	朝起きるのが辛い	53
46	朝起きるのが辛い	54
47	朝起きるのが辛い	55
48	朝起きるのが辛い	56
49	朝起きるのが辛い	57
50	朝起きるのが辛い	58
51	朝起きるのが辛い	59
52	朝起きるのが辛い	60
53	朝起きるのが辛い	61
54	朝起きるのが辛い	62
55	朝起きるのが辛い	63
56	朝起きるのが辛い	64
57	朝起きるのが辛い	65
58	朝起きるのが辛い	66
59	朝起きるのが辛い	67
60	朝起きるのが辛い	68
61	朝起きるのが辛い	69
62	朝起きるのが辛い	70
63	朝起きるのが辛い	71
64	朝起きるのが辛い	72
65	朝起きるのが辛い	73
66	朝起きるのが辛い	74
67	朝起きるのが辛い	75
68	朝起きるのが辛い	76
69	朝起きるのが辛い	77
70	朝起きるのが辛い	78
71	朝起きるのが辛い	79
72	朝起きるのが辛い	80

※ フォネティックコード (記入しないこと)

73 74 75 76 77 78 79 80

◎ 結果の知りた人あるいは結果を知りたい人は、結果を管理センターへ電話かかって下さい。

この調査の目的の達成を /  知りたい

(性別が不明の) /  今すぐ相談してほしい

この調査の目的の達成を /  知りたい

(性別が不明の) /  今すぐ相談してほしい